

[成果情報名] 厳冬期どりコマツナ、チンゲンサイ、コカブのトンネル、無加温ハウス栽培

[要約]平坦地のトンネル栽培や無加温ハウス栽培で、コマツナ、チンゲンサイ、コカブを12月1日から1月5日に播種すると、2月上旬から3月下旬に連続収穫が可能となる。

[担当] 総農セ・栽培部・野菜科・小澤明子

[分類] 技術・普及

[課題の要請元]中北地域普及センター、果樹食品流通課

[背景・ねらい]

2～3月の厳冬期は県産野菜の供給量が少なく、需要の多い葉菜類等の生産が求められている。葉菜類は秋播きしたものを越冬させて、年明けに収穫することができるが、1月下旬以降は商品性が落ちるため出荷は難しい。

そこで本試験では主に直売施設向けに、2～3月にアブラナ科葉菜類を安定生産することを目指し、3品目について播種日や栽培方法の組み合わせにより収穫可能な期間を把握する。

[成果の内容・特徴]

1. トンネル栽培では、コマツナ、チンゲンサイ、コカブとも12月1日から1月5日に播種すると、2月上旬から3月中旬に収穫できる(図1)。
2. 無加温ハウス栽培では、コマツナとチンゲンサイは12月1日から1月5日に播種すると、2月下旬から3月中旬に収穫できる。コカブは12月1日から12月20日に播種すると、3月下旬まで収穫できる(図2)。
3. 3品目ともトンネル栽培が無加温ハウス栽培よりも、半月程度早く収穫できる(図1、図2)。
4. トンネル栽培、無加温ハウス栽培とも、コマツナ、チンゲンサイは60g以上、コカブは90g以上の十分な株重を得ることができる(図3、4)。

[成果の活用上の留意点]

1. 供試品種は、耐寒性が強く低温伸長性が高い「冬里」(コマツナ)、「冬賞味」(チンゲンサイ)、「白馬」(コカブ)である。
2. 施肥はトンネル栽培、無加温ハウス栽培ともに、CDU化成などを用いて3要素成分量が各15kg/10aとなるように全面施用する。
3. トンネル栽培は畦幅150cm(床幅75cm)×株間10cm、3条播き(20,000株/10a)、無加温ハウス栽培は畦幅125cm(床幅75cm)×株間10cm、3条播き(24,000株/10a)とする。いずれも無マルチ栽培とする。
4. トンネル栽培で用いる資材と設置法は、早出しスイートコーンと同様である。本試験で用いた被覆資材はトンネル栽培、無加温ハウス栽培ともに塩化ビニールである。
5. トンネル栽培において、播種後は温度が低い時期なので、温度管理を目的とした開閉は不要である。2月下旬以降に温度が上昇してきたら、日中開閉を行う。

[期待される効果]

1. 県産野菜の流通量が少ない厳冬期に、葉菜類の出荷が可能となる。
2. 複合経営の新たな補完品目として、平坦地の野菜農家や果樹農家が導入可能となる。

[具体的データ]

品目	播種日	12月			1月			2月			3月			4月
		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
コマツナ (冬里)	12/1	◎												
	12/10		◎											
	12/20			◎										
	1/5				◎									
チンゲンサイ (冬賞味)	12/1	◎												
	12/10		◎											
	12/20			◎										
	1/5				◎									
コカブ (白馬)	12/1	◎												
	12/10		◎											
	12/20			◎										
	1/5				◎									

◎: 播種(トンネル)、■: 収穫

図1 トンネル栽培における各品目の収穫日(2011年)

品目	播種日	12月			1月			2月			3月			4月
		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
コマツナ (冬里)	12/1	◎												
	12/10		◎											
	12/20			◎										
	1/5				◎									
チンゲンサイ (冬賞味)	12/1	◎												
	12/10		◎											
	12/20			◎										
	1/5				◎									
コカブ (白馬)	12/1	◎												
	12/10		◎											
	12/20			◎										
	1/5				◎									

◎: 播種(無加温ハウス)、■: 収穫

図2 無加温ハウス栽培における各品目の収穫日(2011年)

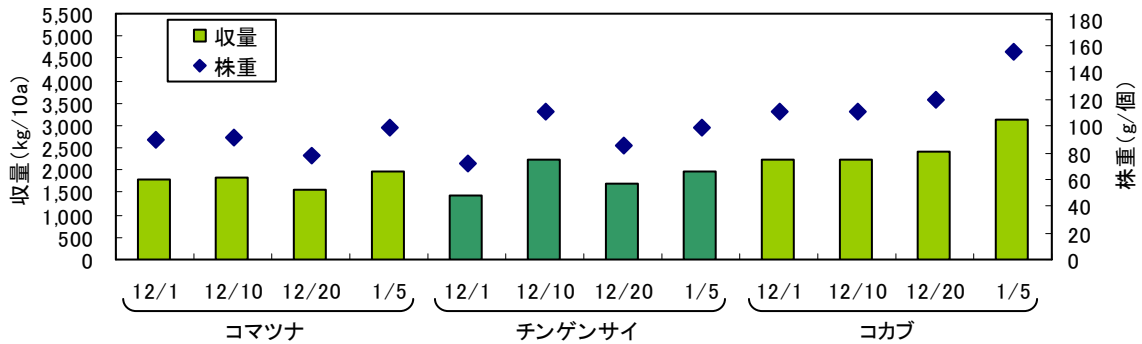


図3 トンネル栽培における収量および株重(2011年)

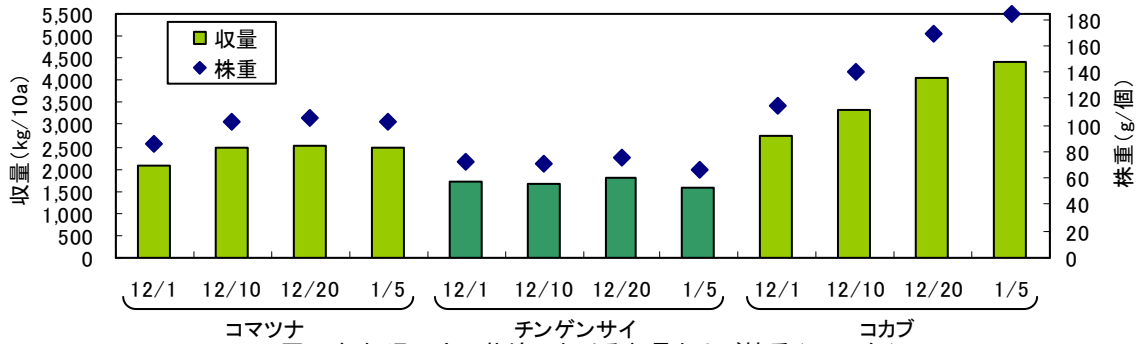


図4 無加温ハウス栽培における収量および株重(2011年)

[その他]

研究課題名：平坦地における冬期を中心とした省力品目の作期拡大技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011～2013年度

研究担当者：小澤明子、赤池一彦